

● 川上家伝来古銃

薩摩の島津家の家臣である川上家に伝來したものである。

慶長五年（一六〇〇）九月の関ヶ原役において西軍に属した島津軍は西軍敗走の殿となつて最後までふみどまり、自らの退路は果敢にも目前の敵中を突破して開いた。

薩摩特有の戦法であるステガマリという犠牲的な捨石戦術で川上四郎兵衛の一隊は脱出をやめ、追跡して来た井伊軍と衝突した。

この時、四郎兵衛の部下であった柏木源藤の放った銃弾が、敵將井伊直政の腕を撃抜き、直政はこの傷が原因で二年後、四十二歳で没したといわれる。

川上家の古銃は、この柏木源藤の使つたものと伝えられ、家宝とされたものである。

全長一〇〇・五センチ、口径二センチで銃口に柑子があり、銃尾は鳶ノ尾になつてている。

銃床は上妻家資料と形状が酷似しており、朱塗りされ前端が焼け焦げている。胴金はない。

機関部は内カラクリで地板側からねづ

● 種子島家伝来銃

初伝銃—種子島家伝来の初伝銃は明治十年の西南役で焼失しており、その後旧家臣の西村家が南蛮筒の銃身のみを所有していたものを種子島家へ献上した。薩摩筒風の銃床は明治の末頃に後補されたもので、機関部の形状も伝八板金兵衛作銃を参考したものである。

銃身のみが外国製であるが天文期の伝来品として否定はできない（写真7）。

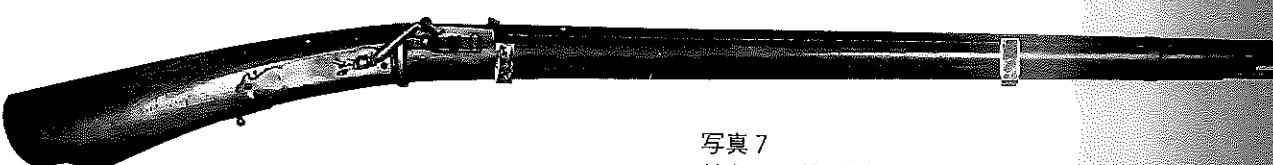


写真7
銃身のみ外国製。銃床機関部は明治の後補。



写真8
江戸中期 平瀬定堅作
必ずしも初伝銃の忠実なコピーとはいえない。

八板金兵衛作銃—國産第一号とされ八板金兵衛慰清定の作品と伝承された竹も西南役で焼失している。本銃には江戸中期の種子島銃工、平瀬定堅の刻銘があり、定堅は安永期の銃工である。定堅は八板金兵衛の作品を原姿として模作したものか、初伝銃二挺の内の一点を模作したもののかは確定できない。

銃身は筋立ての柑子があり元目当の位置は火皿の上にある。銃身長七二センチ口径は一・四センチである。

機関部は外カラクリであるが外國製を原型としている。

この定堅銘の伝八板金兵衛作國産第一号銃は多くの謎を含むもので、初伝の伝来銃の姿を伝えるものとも、金兵衛作の姿を伝えるものとも断定しがたい（写真8）。

止めされている（写真6）。

いずれも薩摩の影響下の領域内に伝來したものであり、初期伝来銃とは別のルートを経た伝来銃の影響を受けたと思われる慶長以前の作品と見るべき資料である。



前期（慶長中期—寛文中期）

慶長時代中期 遠射用大鉄砲
銘 橋並屋勘左衛門 全長206.5センチ、口径2センチ

慶長時代中期 大鉄砲
全長168センチ、口径2.4センチ

慶長時代中期 大鉄砲
無銘 全長177センチ、口径2.1センチ

製作年月が刻銘された火縄銃で信頼できる資料は慶長期以降の作品である。慶長頃の作品は簡素ではあるが銃器としては世界のトップレベルの作品であり、日本特有の形状が見られることが日本化はこの時代に完成している。

砲としては世界のトップレベルの作品であり、日本特有の形状が見られることが日本化はこの時代に完成している。

銃身——八角銃身で柑子のないものが多い。目當は筋割が主で、中目當てが付けられ矢倉（照準器）が使用される攻城用の長大な大鉄砲が出現する。（写真1）

雨覆（あまおひ）は固着されており楔（くわい）ではなく、この時代の後期になって竹節（くさび）が工夫され脱着可能となる。火蓋（ひあわ）は大山小山の谷が深く、指掛けは小さく短い。火蓋の小鉢（こばち）に穴がないものがある。

銃床（じゅうとう）——庵（いぢ）は浅く、全体に直線的である。床尾（ゆきお）の芝引（しばひき）の部分が冠落（かんりおち）し風に削りこまれたものが多い。

用心金（いのちぎ）のないものが多いが、用心金が使用されはじめるのもこの時代である。引鉄（ひてつ）は球形で大きなものを見る。

目釘穴（めだいあな）の座金（ざがね）は付けられないことが多

いが、座金のあるものは大きく作られている。台木は檜材で色濃く仕上られている。（写真2）

機関部——外カラクリと内カラクリが

どのような精密で複雑なメカニズムも、どの時代にすでに完成されている。（写真3）

蟹目ナキ内カラクリ
徳川家康使用 三匁五分玉筒（稻富流仕法）
銘 宮栗銅鑄三重張慶長十六年十月吉日 日本清堯花押

写真1

写真2 慶長時代後期 三匁五分玉筒

無銘 全長143センチ、口径1.3センチ

無銘 全長145センチ、口径1.3センチ

寛永時代 三匁五分玉筒
銘 高倉甚六作 全長129.5センチ、口径1.3センチ

写真3

寛永時代 五十五目玉大鉄砲
銘 江州國友甚兵衛有政 全長135センチ、口径3.2センチ

寛文時代 三匁五分玉筒
銘 以南蛮大筒鐵重張 戊申寛文八年冬十一月日 芝辻（花押）
全長134.5センチ、口径1.3センチ

中期（寛文末頃—寛政頃）

飾り柑子が付けられ、銃身の象嵌や銃床や金具にも装飾性が顕著となる。

泰平の時代に入り、戦場での体験や記憶を持つ人々の少なくなる寛文末頃から、

鉄砲は次第に実用をはなれて華美・軟弱の様相を見せ始める。鉄砲禁制が強化される元禄時代にはこの傾向は頂点に達し、銃口部には過大な

火皿の窪みは浅く小さくなり、火蓋の掛けが長く伸びはじめる。鉄砲の製造量が大きく減少しはじめるのもこの頃からである。中期以降の火縄銃は現存数も多く、実見できる機会も多い。

銃身—前期の古様さを残しながら変化を見せる。銃口部に柑子がもうけられ、兩端はスライド式の竹節（クサビ）でしっかりと装着され、しかも脱着が容易といい。

戦をはなれた形骸化の顯れである（写真1）。

長大な遠射用の大鉄砲は姿を消し、軽筒などは小口径化するが、いずれも象嵌も施されることが多くなる。

射的筒

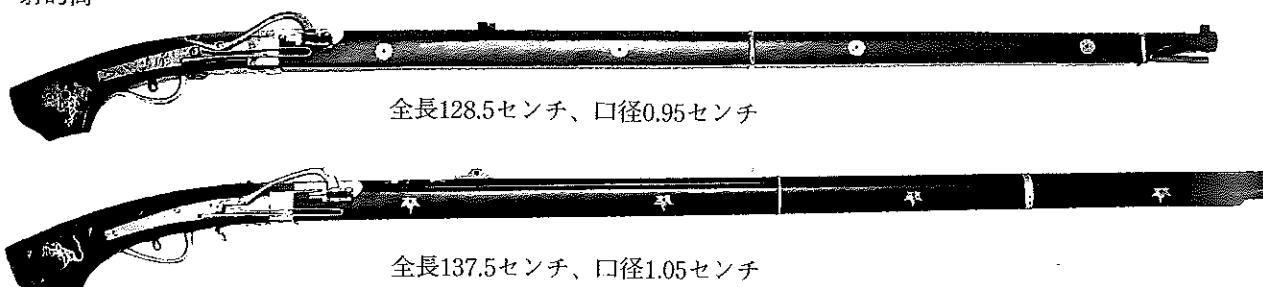
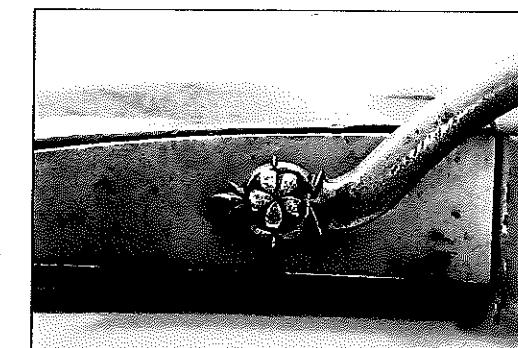
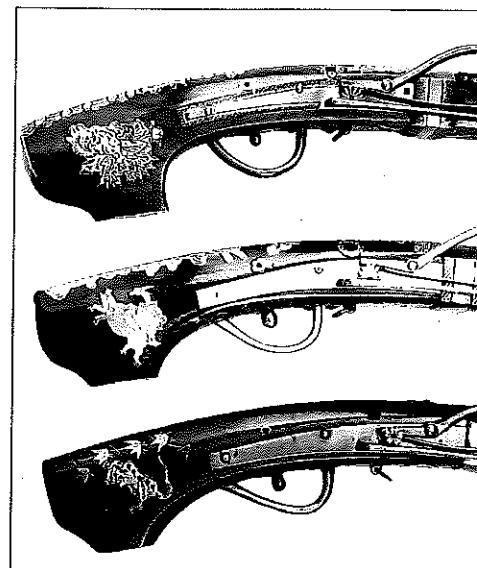


写真2
全体的に装飾が華美となる。

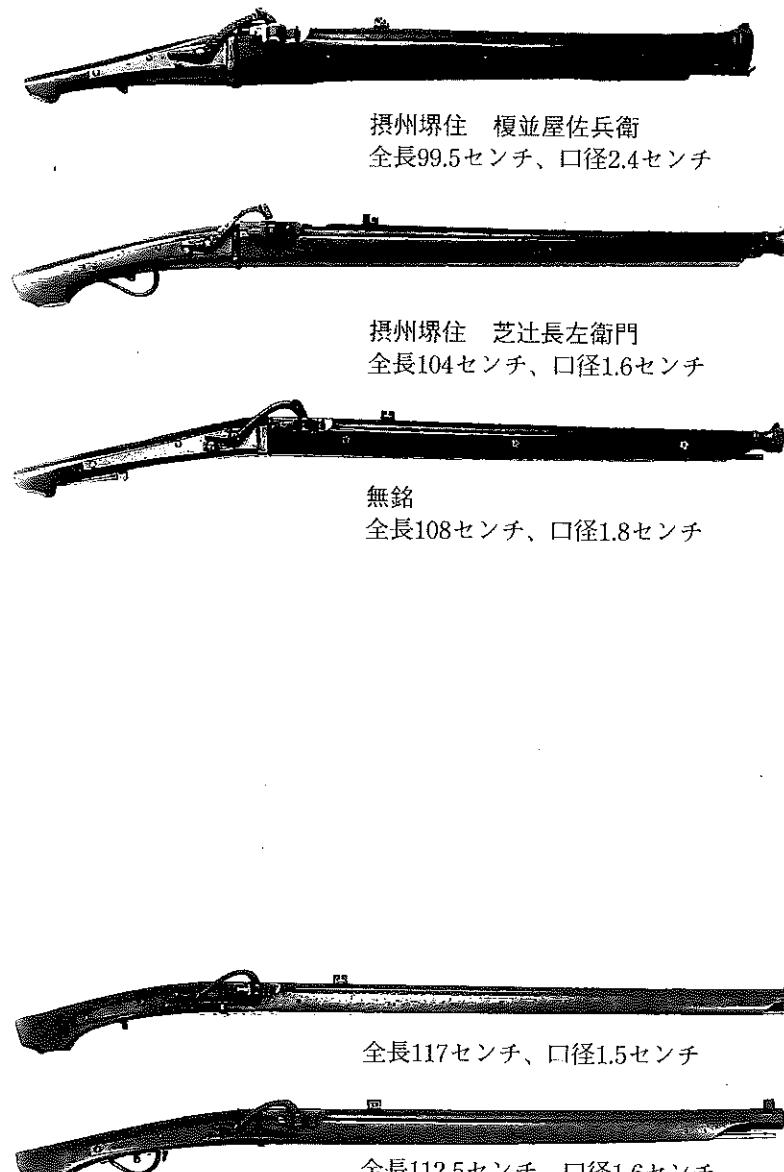


銃床—前期中期において砲術流派の特有の仕法形状が著名となり、銃床材の木目の美しさを表現するため仕上げの色合いが淡色となっていく。細筒では金・銀・銅・真鍮製の飾板金が用いられることが多くなる。

機関部—外カラクリ・内カラクリの多くの型式種類は前期において、すでに完成されており、特に進歩の跡がなく停滞が見られる。

弾金や火挿み、用心金を竹節状にデザインするなど、部品にも装飾が見られる（写真2）。

写真1 中期の軍用土筒。



中期の軍用番筒。

後期　〈文化文政期—幕末〉

化政期に頻発する外国船の侵犯事件から、国内には国防意識が高まり始めた。

火砲や銃器の整備が見直され、俄かに砲術家や鉄砲鍛冶の地位向上の傾向が見られ始める。

実用的で頑丈な軍用筒の発注が相ついだが、生産規模の縮小期間が永かつたため供給力は不足していた。

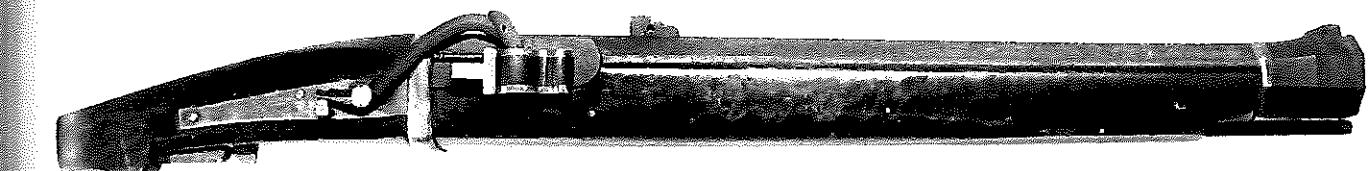
「臣 ○○○○造之」「應需 ○○○君」といった鍛冶銘や所持銘と共に天保から安政頃までの製作年紀が刻銘された主に士筒が多見されるのが、この時代の特徴である（写真1）。

また墓碑や過去帳から幕末に活動した鍛冶名の確認がなされることも多い（写真2）。

天保年間に始まる洋式銃や火砲の採用にもかかわらず、慶応年間にもなお火縄式和銃の製作は意欲的に続けられた。

この後期の作品は数多く現存品を見ることができ、比較的健全で損耗が少なく鑑別が容易である。全体的な形態や特徴は中期のものを繼承している。

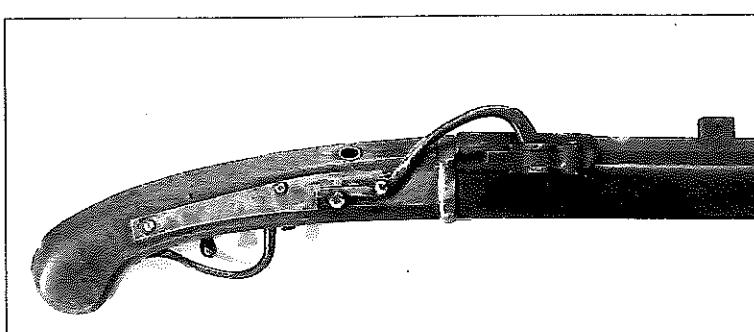
写真1



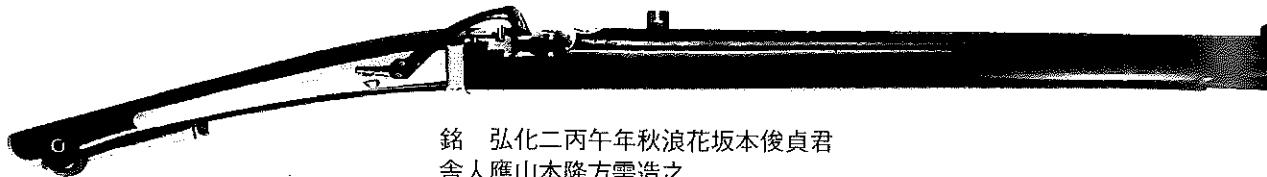
銘 阿州臣 近藤幾衛正明造之
全長105.3センチ、口径3.2センチ



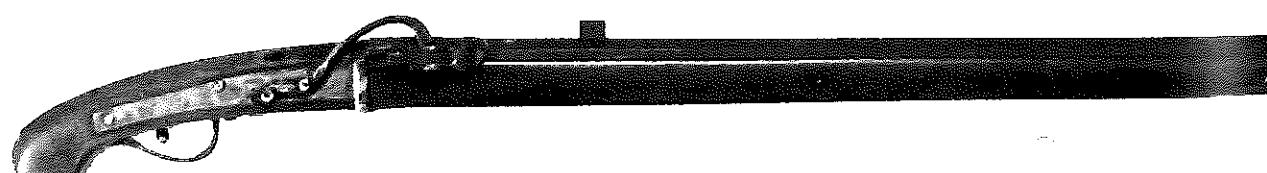
銘 仙台臣 阿部伝八藤原時功謹造
天保六乙未歳二月吉祥日
全長145.5センチ、口径1.4センチ



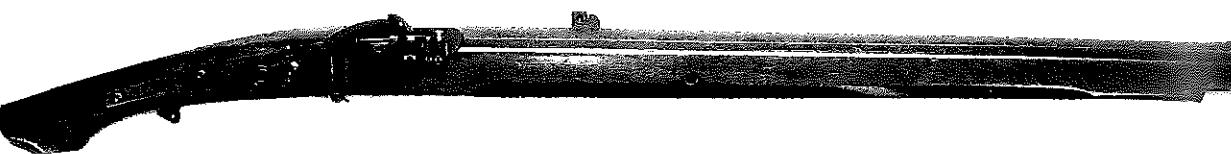
銃床尾に特徴。



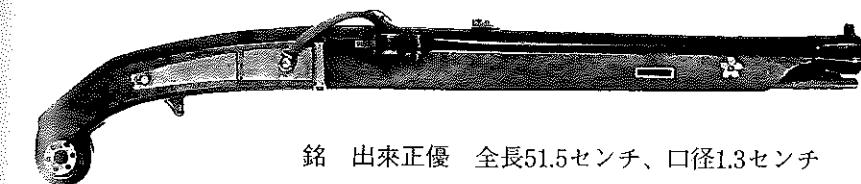
銘 弘化二丙午年秋浪花坂本俊貞君
舍人應山本隆方需造之
江州國友源右衛門 充胤
全長107.5センチ、口径1.8センチ



銘 嘉永七甲寅年箋吉辰
摶泉界住 檀並勘左衛門重恭
全長97センチ、口径1.3センチ



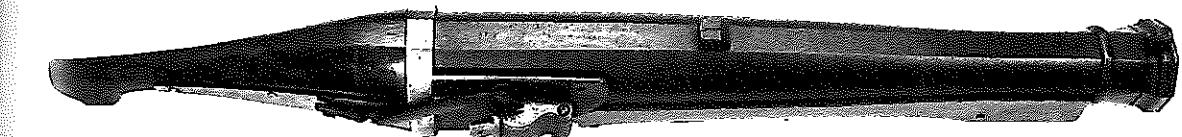
銘 摂州堺住 芝辻長左衛門保敬作 全長103センチ、口径1.8センチ



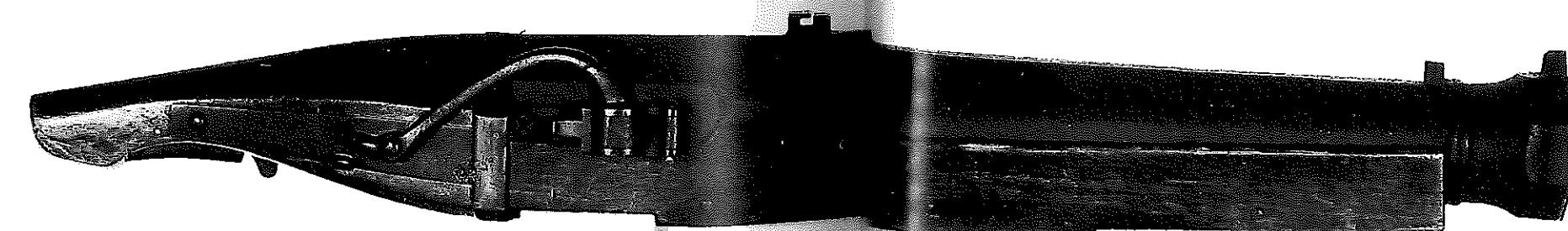
銘 出來正優 全長51.5センチ、口径1.3センチ



銘 備前國長船住 橫山祐行 全長110センチ、口径2.6センチ



銘 児島利助昌和作 全長94.5センチ、口径3.2センチ



銘 出來助右衛門正優 全長101センチ、口径4.03センチ

写真 2

製作地別による地方的分類

火縄銃を量産した地方としては、堺、國友、日野、阿波、仙台、備前、薩摩、土佐、長州、紀州などが知られるが、その地方特有の典型化が見られる。

□ 堀 筒

（大阪府堺市）

典型的な堀筒の特徴は二刃目玉（口径十一粁）から三刃目五分玉（口径十三粁）までの細筒に見られるもので、過剰なまでの装飾が絢爛華麗な姿を見せている。

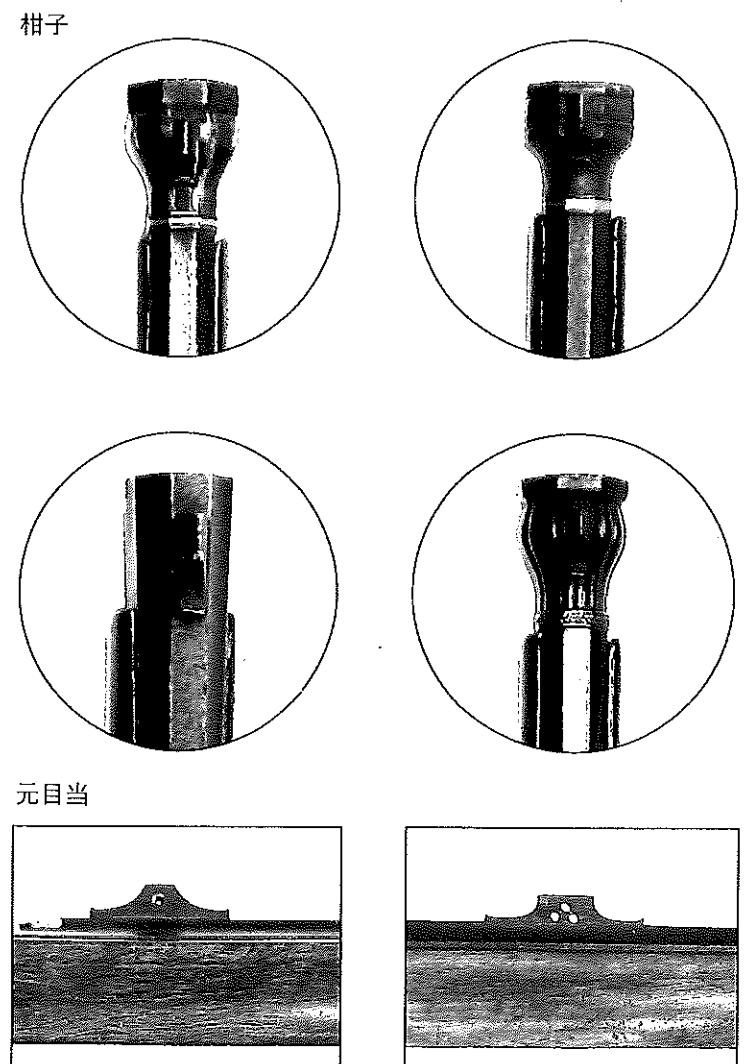
銃身上面に濃厚な象嵌を施すことが多く、花鳥、風月、禽獸図、歴史絵図、家紋、文字などが、金・銀・銅・真鍮などの色金を使用して美しく象嵌されている。銃身は八角銃身が多用される。

銃床木部にも真鍮板や銀板の飾金具が嵌めこまれ、細鑿彫が意匠的である。

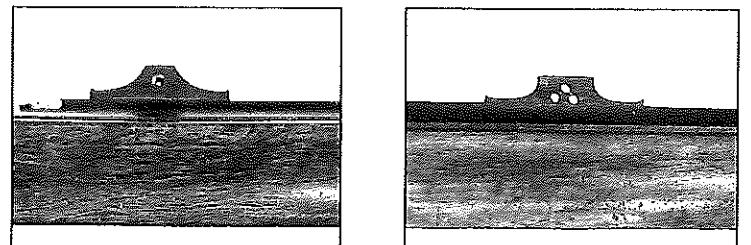
金具も幅広の胴金、半菊形の蟹ノ目隠シ、地板などに鑿彫りが施されている。

堀筒の特徴の一つである柑子（銃口部）

の形状は、大きく膨らんで種々の形を見



元目当



せているが大別すると八角柑子と芥子柑子である。

これらは他の地方にも見られる形状であるが、堀筒は少し大きく、芥子柑子には筋立てが施され、これに銀を被せるなど装飾性が強い。また元目当には富士山

の大きなものが使われていることが多く

い。

「古銃事典」P. 96では種子島柑子は芝辻系、芥子柑子は榎並系などと断定されているが、芝辻系の銘の作品には全ての形状の柑子が採用されており、全く根拠のない説である。

これら典型的な堀筒は主に射的用銃

専用に製作されたもので多分に趣味性・スポーティ性の強い作品である。

三刃目五分玉以上の六刃目玉（口径十六粁）十刃目玉（口径十九粁）や大口径の大筒などの番筒や士筒は、軍用であるため砲術流派の仕様によって発注され、特に堀製としての特徴を見ることはない。

堀の地名の由来は摂津、和泉、河内の三国の国境に位置するためであるが、製銃地は摂津側に属したため「摂州堀住」と刻銘され、「摂泉界住」と刻銘されることもある。

堀鉄砲鍛冶名は芝辻、榎並屋、井川、井上、畠鍛冶、籠屋、嶋屋、田中、野田、山田、嶋谷、松本などが知られている。桜之町大道には西側に芝辻理右衛門屋敷、東側に榎並屋勘左衛門屋敷があつた。理右衛門鍛冶場の北端の位置に現在、水野鍛錬所があつて日本刀の鍛造が行なわれているのも奇しき縁である。



華麗なる堺筒

火縄銃を産みだすことになった。

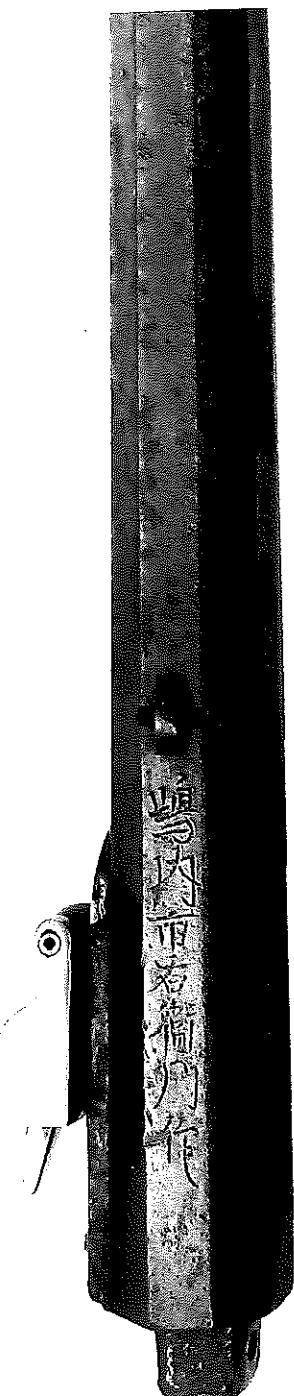
中でも堺の鐵砲は、その立地条件から都会的な、より洗練された美しい姿を見せており。工場は店舗をも有し、規格化された完成品を量産して店頭に陳列し、積み共通の優れた点である。鎖国政策による外来文明との隔絶は、火縄式鐵砲を飽きることなく三百年間も製作しつづける事となり、世界で最も美しく精度の良い

流れる様な線の美しさ、型態上のバラシの良さ、木部加工の見事さなどは和銃共通の優れた点である。鎖国政策による外来文明との隔絶は、火縄式鐵砲を飽きることなく三百年間も製作しつづける事となり、世界で最も美しく精度の良い

武具に美術的装飾を施すことは刀装・甲冑も同様であり、顧客の趣好に応じて銃身上には象嵌、銃床には飾金具を配し、堺筒特有的の絢爛華麗な鐵砲が典型化していく

ものも少なくない。床の間に飾られた美しい堺筒は一幅の絵を見る如く所有者の目に眩しく輝き、彼の心を満ちたりたものにしたことであろう。

鳴内市右衛門



榎並勘左衛門寛好



籠谷与三右衛門

典型的な堺細筒の特徴 〈象嵌と飾金具〉



●堺筒のいろいろ●



射的専用筒
上 摂州住 田中善五郎信之
全長149センチ、口径1.2センチ
下 野田吉兵衛
全長141センチ、口径0.8センチ



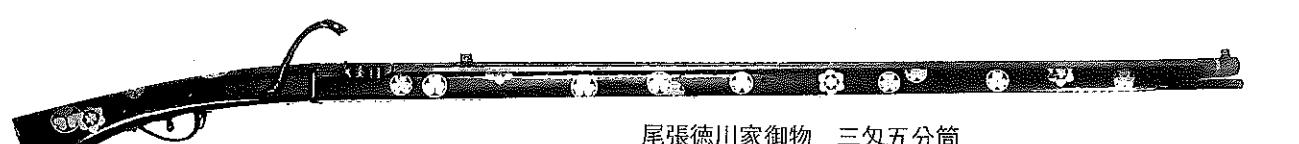
二十目玉 軍用土筒
銘 摂州堺住 梶並屋佐兵衛正吉
全長99.5センチ、口径2.4センチ



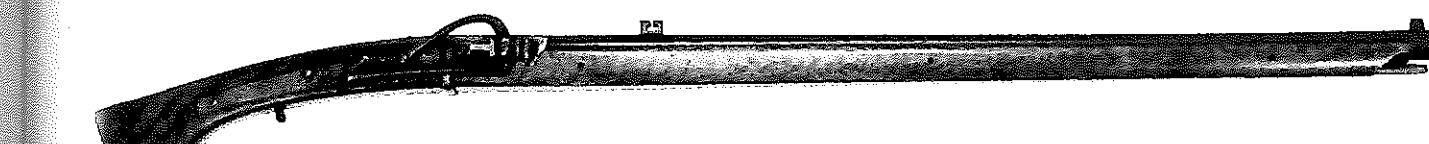
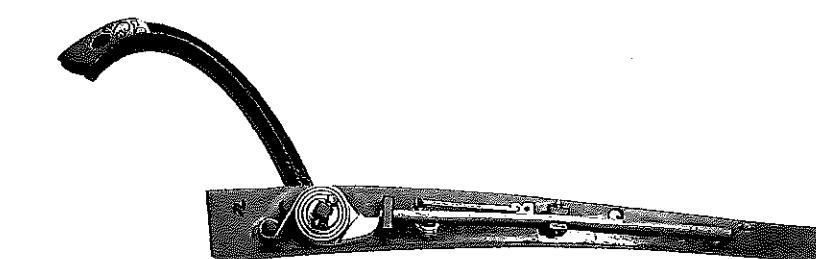
十々玉 軍用土筒
銘 摂州堺住 芝辻長左衛門保敬作
全長103センチ、口径1.8センチ



赤銅金具 射的用筒
銘 刃惣巻張 芝辻長左衛門保敬
全長136センチ、口径1センチ



尾張徳川家御物 三勾五分筒
全長135センチ、口径1.3センチ
銘 以南蛮大筒鍛重張 戊申寛文八年冬十一月日 芝辻花押



六々玉 軍用番筒
上 銘 摂州住 籠谷与三右衛門 全長117センチ、口径1.5センチ
下 銘 摂州住 井川与三兵衛喜久 全長113センチ、口径1.6センチ

◇堺鍛冶銘◇

籠谷吉三右衛門・籠谷吉三右衛門資次・籠谷權兵衛・籠谷權右衛門・籠谷与三右衛門
資次・籠谷喜一郎・籠屋權右衛門・籠屋与三右衛門景房・籠屋與三右衛門資次・籠屋与

井川金兵衛・井川与佐介常喜邦・井川与佐
兵衛喜邦・井川与三兵衛・井川与三兵衛喜

彦兵衛・井川兼兵衛・井川与三兵衛喜正・井
川与三兵門重光・井川与三兵衛喜久・井川

与一兵衛喜久・井上閑右衛門主福・井上閑
右衛門寿以・井上閑右衛門・井上閑右衛門

喜晴・井上与三衛門・井上与三兵衛喜久・井
上閑右衛門寿次・井上團右衛門・伊国大弥

兵衛・猪川与三兵衛・唾鍛治七兵衛・唾鍛
治五兵衛・唾鍛治久左衛門・井上閑右衛門

吉次・井上閑右衛門寿正・唾鍛治七郎兵衛・
井上閑左衛門・井上閑左衛門寿次・樓並屋

次右衛門・樓並屋作兵衛・樓並屋勘左衛門
方貴・樓並屋勘左衛門重繼・樓並屋伊兵衛・

樓並屋伊兵衛尉・樓並屋勘左衛門・樓並屋
佐兵衛政吉・樓並屋長兵衛・樓並屋小兵衛・

樓並屋佐兵衛宗正・樓並屋甚兵衛・樓並屋
弥兵衛・樓並屋佐兵衛正道・樓並屋次右衛

門・樓並屋佐兵衛門・樓並屋勘左衛門尉重
共・樓並屋久兵衛・樓並屋勘七正繼・樓並

屋勘左衛門重雄・樓並良藏宣直・樓並勘左
衛門・樓並行平・樓並伊平・樓並勘左衛門

方寬・樓並勘左衛門重泰・樓並彦兵衛・樓
並宇兵衛重邦・樓波伊兵衛・樓波屋佐平・江

波屋亦兵衛・樓並屋伊兵衛信清・樓並伊兵
衛・樓並屋佐兵衛・樓並屋佐兵衛正吉

芝辻理石衛門・「芝辻伝左衛門」・「芝辻利
右衛門」・芝辻長左衛門・芝辻長左衛門保敬・
芝辻長左衛門邦考・芝辻長左衛門三原・芝
辻長右衛門富龍・芝辻信左衛門・芝辻治左
衛門・芝辻重次郎・芝辻甚太郎・芝辻長右
衛門為國・芝辻長兵衛・芝辻半兵衛
兵衛・近藤嘉市正利・後藤伊兵衛
屋六兵衛來金次

川上助四郎重次・國友弥四郎・源鍛治七
兵衛・近藤嘉市正利・後藤伊兵衛
島谷喜八郎・島谷喜八郎重堯・島谷喜八
郎重高・島谷清右衛門重勝・嶋屋喜八郎・嶋
島谷源九郎・島谷五郎左衛門・島谷市右衛
門信定

芝辻理石衛門・「芝辻伝左衛門」・「芝辻利
右衛門」・芝辻長左衛門・芝辻長左衛門保敬・
芝辻長左衛門邦考・芝辻長左衛門三原・芝
辻長右衛門富龍・芝辻信左衛門・芝辻治左
衛門・芝辻重次郎・芝辻甚太郎・芝辻長右
衛門為國・芝辻長兵衛・芝辻半兵衛
兵衛・近藤嘉市正利・後藤伊兵衛
屋六兵衛來金次

早打三連銃
攝州住 國友弥四郎
全長42センチ、口径1.3センチ

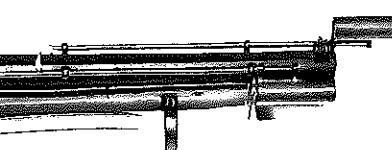
●特殊な堺筒●

籠谷吉三右衛門・籠谷吉三右衛門資次・籠
谷權兵衛・籠谷權右衛門・籠谷与三右衛門
資次・籠谷喜一郎・籠屋權右衛門・籠屋与
三右衛門景房・籠屋與三右衛門資次・籠屋与

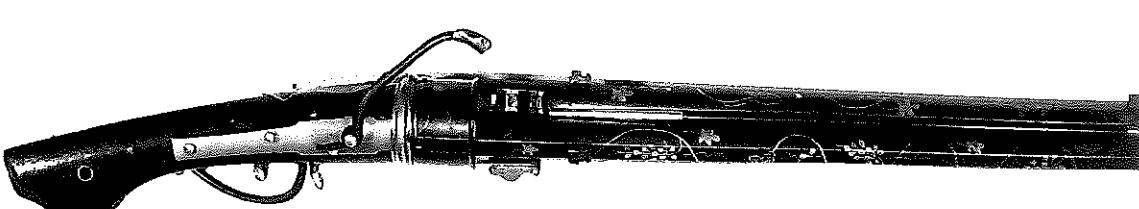
兵衛・近藤嘉市正利・後藤伊兵衛
島谷喜八郎・島谷喜八郎重堯・島谷喜八
郎重高・島谷清右衛門重勝・嶋屋喜八郎・嶋
島谷源九郎・島谷五郎左衛門・島谷市右衛
門信定

芝辻理石衛門・「芝辻伝左衛門」・「芝辻利
右衛門」・芝辻長左衛門・芝辻長左衛門保敬・
芝辻長左衛門邦考・芝辻長左衛門三原・芝
辻長右衛門富龍・芝辻信左衛門・芝辻治左
衛門・芝辻重次郎・芝辻甚太郎・芝辻長右
衛門為國・芝辻長兵衛・芝辻半兵衛
兵衛・近藤嘉市正利・後藤伊兵衛
屋六兵衛來金次

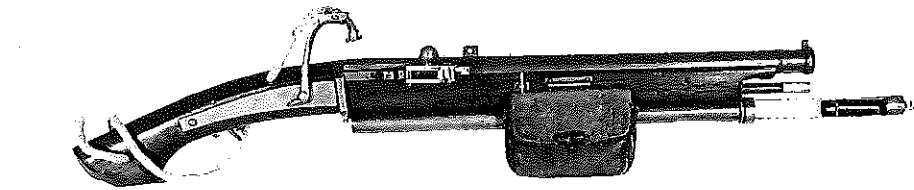
芝辻理石衛門・「芝辻伝左衛門」・「芝辻利
右衛門」・芝辻長左衛門・芝辻長左衛門保敬・
芝辻長左衛門邦考・芝辻長左衛門三原・芝
辻長右衛門富龍・芝辻信左衛門・芝辻治左
衛門・芝辻重次郎・芝辻甚太郎・芝辻長右
衛門為國・芝辻長兵衛・芝辻半兵衛
兵衛・近藤嘉市正利・後藤伊兵衛
屋六兵衛來金次



早打三連銃
攝州住 國友弥四郎
全長42センチ、口径1.3センチ



早打三連銃
堺製 全長70.5センチ、口径1.2センチ



早打八連銃
攝州住 芝辻彦八郎
全長50センチ、口径1.2センチ

□ 日野筒

〈滋賀県蒲生郡日野町〉

日野の北東十里の位置に、有名な鉄砲鍛冶集団である国友があった。

戦乱がしづまつて兵器の需要が減少しはじめると、同じ近江というエリアの中で近接した両集団は、おたがいが目の上のたんこぶとなつた。

国友にはひきつづいて幕府の定式鉄砲の受注があつたが、この制度からみはなされた日野鍛冶はやむなくダンピング商法を選ばざるを得なかつた。

「日野鉄砲うどん張り」と、あたかも日野筒が安物のごとく表現され、国友鉄砲の垂流傍系とまで酷評する研究者もいる。しかし現存する日野筒は軍用筒は少ないが、日野筒特有の典型化もみられ、高

級な作品もありその製錬技術は他国に比して劣るものではない。

これは国友鍛冶の作品にも多くみられ、いる（写真2）。

身上には色金の文字や図柄、家紋などの象嵌、地板にも片切彫や色金象嵌、台木

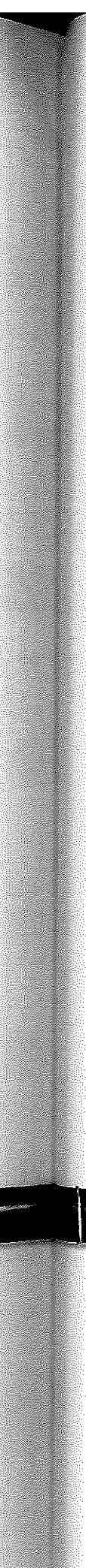
にも飾板が嵌めこまれている（写真1）。特に火挟みや用心金、弾金を竹節にデザインするなど、綿密な細工で商品性を高めようとしている。

これは国友系の傍系などというものではなく、むしろ商都であつた堺の鉄砲鍛冶の意欲的な販売姿勢を指向したもので、堺筒の影響をこそ大きくうけているものである。

日野鍛冶の作品でよくみられるものに、田付流の仕法による銃床尾が直線で内力ラクリのものがある。柑子のない銃身には文字象嵌、地板が鉄であれば図柄が象嵌され、真鍮であれば図柄が線刻されて



堺風の華麗な象嵌装飾。



つて製作地の特徴ではない。
この形式を「文四郎流」として説明する者がいるが誤りである。渡辺文四郎流は田付流の傍系かも知れないが、それほど盛隆した流派ではなく、田付流の仕法にもとづく形式とするのが正しい。

写真2

日野製 射的狩猟用筒

銘 江州日野住 和田太一郎重正

全長127センチ、口径1.1センチ



日野製 射的専用筒

銘 江州日野住 小林眞平氏重作

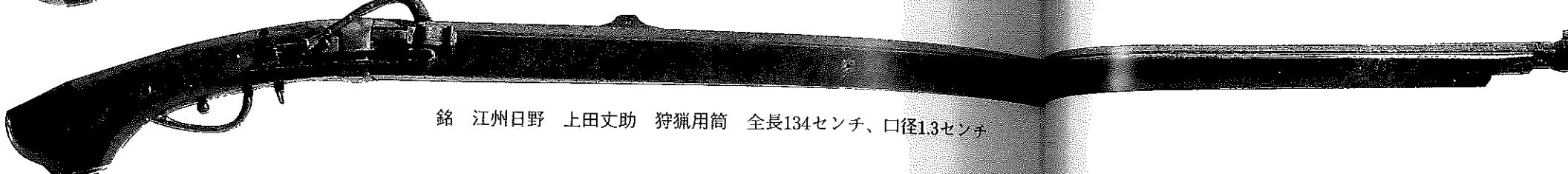
全長137センチ、口径1.1センチ



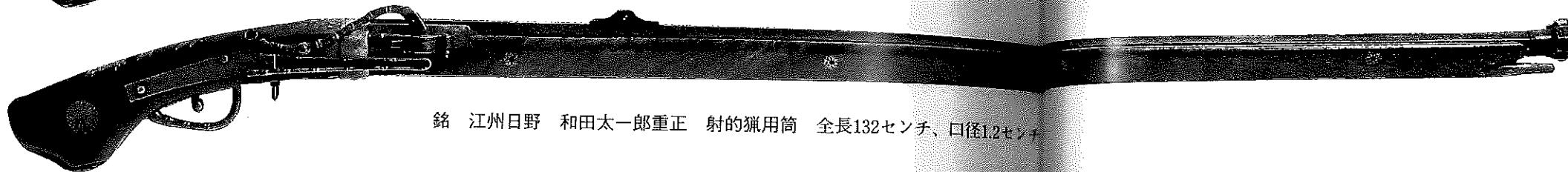
鉄地板に金・銀・銅の象嵌。



銘 江州日野 鎮中益屋六太夫 狩獵用筒 全長130センチ、口径1.3センチ



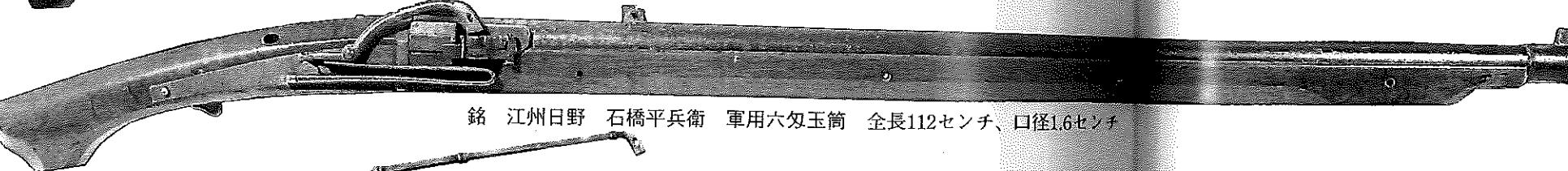
銘 江州日野 上田丈助 狩獵用筒 全長134センチ、口径1.3センチ



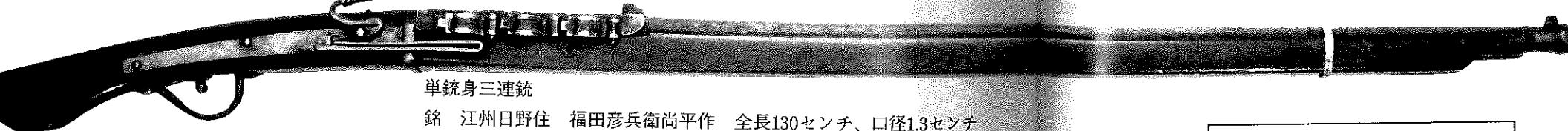
銘 江州日野 和田太一郎重正 射的獵用筒 全長132センチ、口径1.2センチ



銘 江州日野 和田治太夫重光 射的用筒 全長127センチ、口径1センチ



銘 江州日野 石橋平兵衛 軍用六匁玉筒 全長112センチ、口径1.6センチ

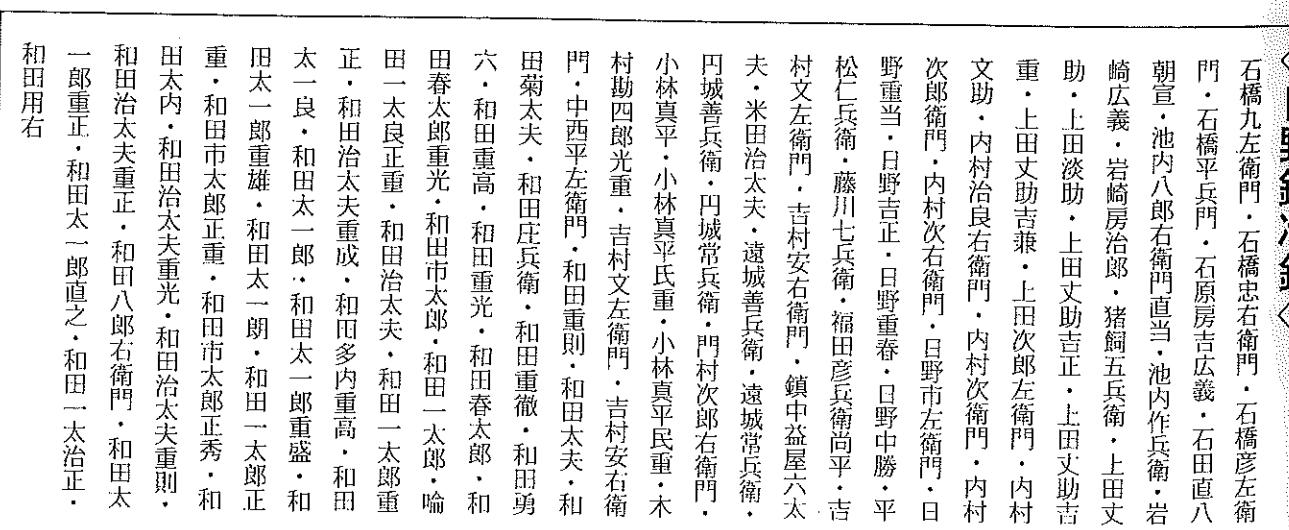
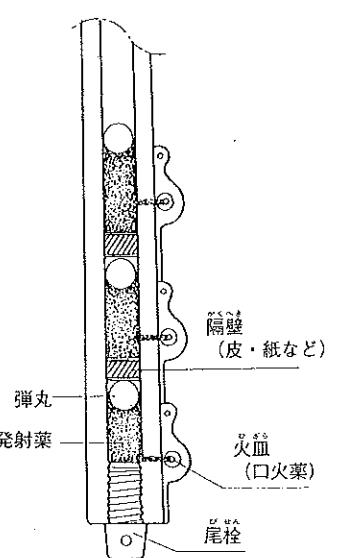
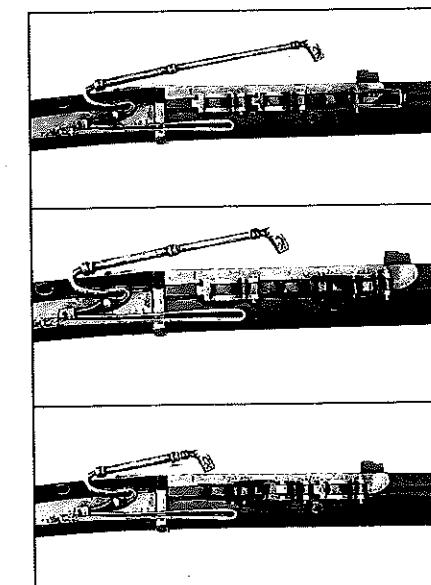


銘 江州日野住 福田彦兵衛尚平作 全長130センチ、口径1.3センチ

単銃身三連銃

日野鍛冶の中には特殊な連發銃を製作する者があり、技術的にも第一級の鍛冶群であった。

単銃身三連銃薬室部



□紀州筒

（和歌山県）

紀州は本州最初の鉄砲伝来地である。今

日ではなかば伝説的でさえある根来寺、杉

ノ坊の津田監物が種子島より根来へ鉄砲

を持ち帰ったという伝承は「鉄砲記」に

も詳びらかである。

また津田氏によって創始される津田流

および自由斎流砲術は日本最古の砲術に

属する。

このような歴史的な地であるため永年、和歌山県内を調査したが初期的な戦国期の古砲はついに発見されなかつた。

筆者は十数年前、和歌山市内に現存する紀州の鉄砲鍛冶家出来氏（鉄砲火薬商出来助本店）の調査を中心に、強い特徴を示す紀州製鉄砲の分類に成功した。「紀州筒」と名づけて、典型化された地方的特徴として広く世に紹介したが、これららの作品はすべて江戸中期以降に製作されたものである。

紀州筒の特徴を有しながら銃身の銘は

堺鍛冶であるものが多く、まれに國友銘を見る。これらは内カラクリで用心金ではなく、火挾、目当、銃床は細筒と同様の特徴を示す。軍用には「ナマコ金」をつけて強度を増し、引金は二角形となる。

で鍛冶銘のいかんを問わず紀州筒として分類すべきである。なお昨今、紀州筒をして「根来鉄砲」「雑賀鉄砲」と俗称するおもむきがあるが、時代背景からみて適当でない。

◇紀州筒の特徴◇

細筒二匁玉一三匁五分玉 口径十一ミリ十三ミリ（写真1）

細筒二匁玉一三匁五分玉 口径十一ミリ十三ミリ（写真1）

紀州筒の多くは細筒で獵師筒や射的筒であつて、口径の大きい軍用筒は少ない。銃身、銃床、機関部および金具に独特の形状があり、一見して識別することができる。

銃身 柑子（こうじ）

「柑子」のあるものとないものがある。柑子は八角柑子で小振りである。先目当は杉型、元目当は紀州筒特有の片富士型（写真2）。

銃床 廉は浅く台尻の背は冠落しに角がおとされて薄い。清堯の作品など江戸初期に一部見られるが、後期には井上閑右衛門系と紀州筒にのみ多見される（写真3）。

機関部 蟹の目なき外カラクリであるが、カムは棒カムで薩摩筒に似る。火挾の鋸はナットで止められる。火挾・弾金。

中筒・馬上筒二六匁玉一十匁玉 十六ミリ十九ミリ（写真5）

写真3
上 銘 若山 吉田新六正春
下 銘 井上閑右衛門

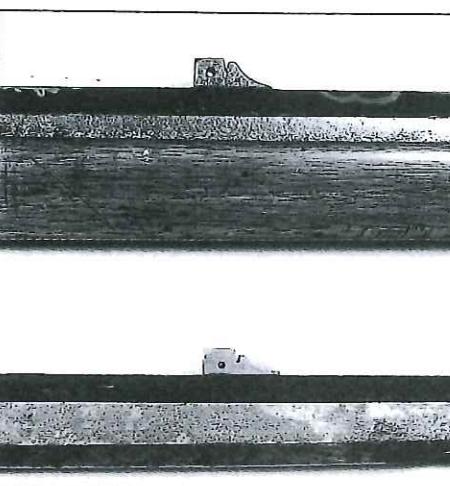
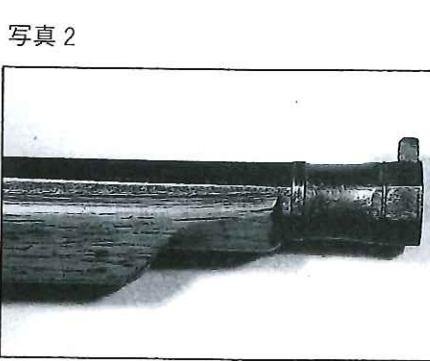
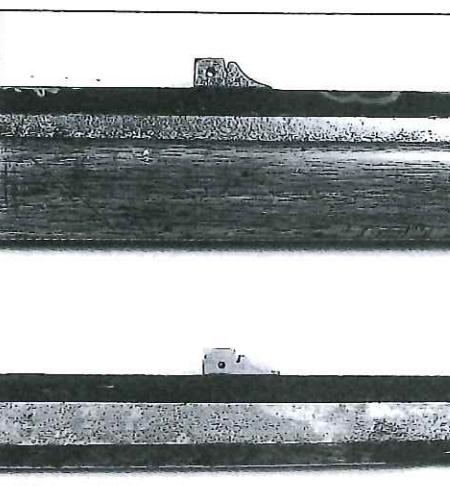


写真2

紀州八角柑子(貧弱な感じ)

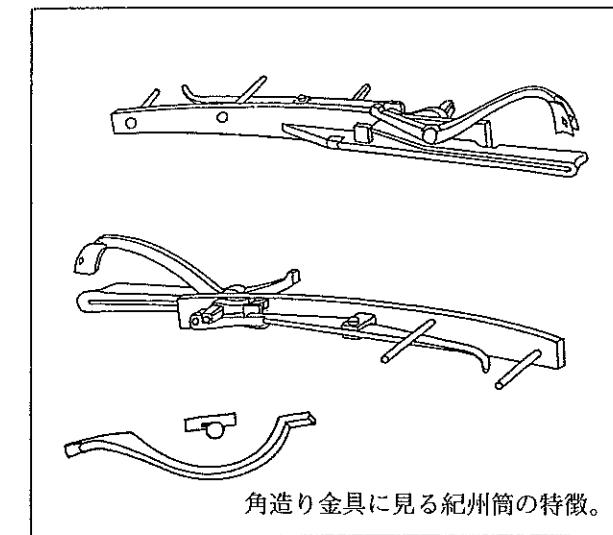


◇紀州鍛冶銘◇

出来助右衛門包凭	早川政因	川上甚藏正次
出来助右衛門正章	早川甚六政常	若山吉田新六正春
出来助右衛門正優	早川甚六正英	吉田弥兵衛元広
出来正優	早川正九	井出安右衛門正富
出来助右衛門正義	早川甚之助正九	広里定勝
若山押鍛治武兵衛	川上平八正隆	
紀州住早川政陳	川上仙六正康	
	川上甚藏正治	

〈台師〉

喜多鶴久右衛門正直
喜多鶴茂兵衛正秀
喜多鶴弥太郎
堀内利兵衛忠光



角造り金具に見る紀州筒の特徴。

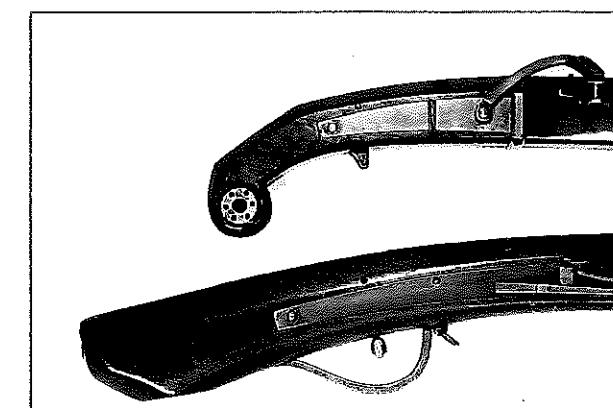
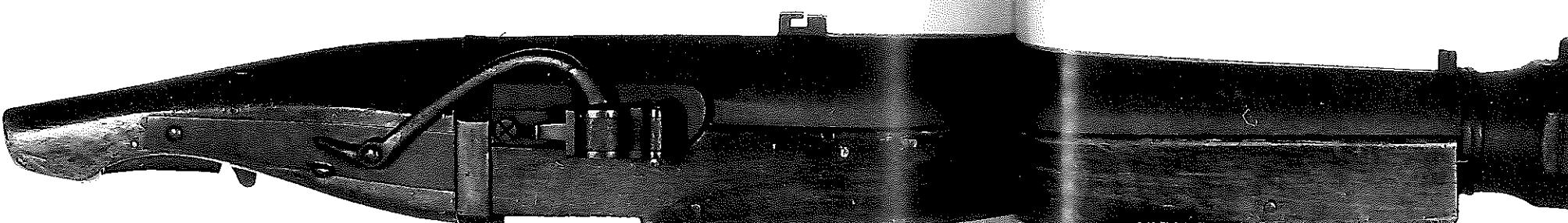


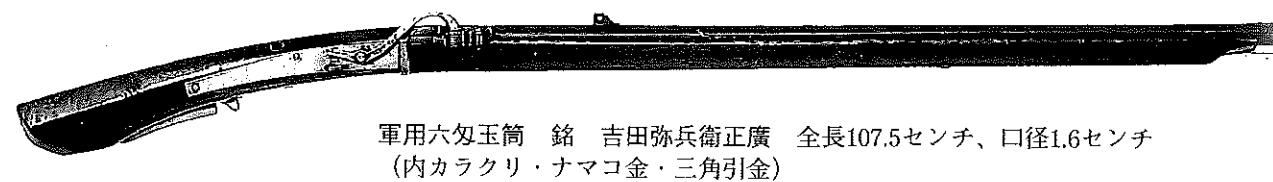
写真4
紀州筒引鉄二種
軍用は三角形、その他は涙滴形。



百目玉大筒(紀州大筒は少ない)
銘 出来助右衛門正優 全長101センチ、口径4.03センチ
和歌浦東照宮(内カラクリ・ナマコ金・三角引金)

写真5

軍用十匁玉筒 銘 井出安右衛門正富 全長103センチ、口径1.9センチ
(内カラクリ・ナマコ金・三角引金)



軍用六匁玉筒 銘 吉田弥兵衛正廣 全長107.5センチ、口径1.6センチ
(内カラクリ・ナマコ金・三角引金)



三匁五分玉紀州馬上筒 銘 出來正優 全長51.5センチ、口径1.3センチ

□國友筒

（滋賀県國友町）

現存する六万挺の火縄銃の中で、最も多數をしめるのが國友系鍛冶による作品で、堺系がこれにつぐ。

幕府御用鍛冶として堺や日野鍛冶も指定を受けたが、幕府から「定式鉄砲」として年々安定した発注を受けたのは独り國友鍛冶のみであった。

幕府にならって諸侯や砲術家たちも競つて國友へ用銃を発注したこと也有つて、品質精度の吟味された作品が数多く生産されることになった。

したがつて、武用の鉄砲は砲術流派の仕様にしたがつて発注されるため、外観上は國友地方特有の特徴を求めるることは難しい。

鉄質が良く、仕上げも良いものが多いが、むしろ地方的特徴に乏しいのが國友筒の特徴といえよう。

國友鍛冶はその技術の高さから、抱工として招聘をうけ、全国各地へ移住するものが少なくなかつた。

この國友系鍛冶は移住後も「江州國友」を刻銘することがあり、作品は移住

地の地方的特徴を示すことになる。

また、特異な形状の流派的特徴のある用銃製作での國友鍛冶の活躍は面白躍如たるものがあるが、これは後に述べる流派別区分に属するものである。

このように國友鉄砲は製作数も多く、形状もあまりにも多様であるため、典型化された地方的特徴はとらえがたい。

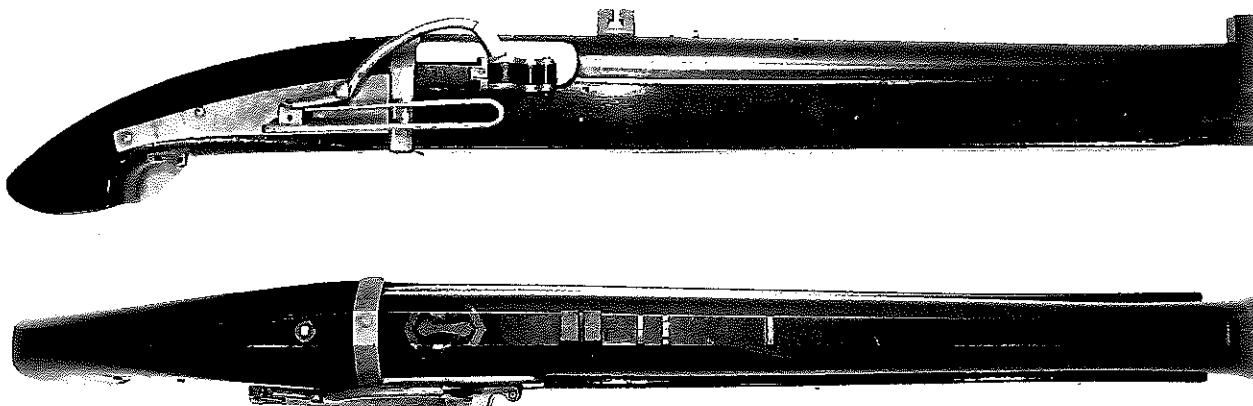
國友製の細筒は的中精度の追求がみられ、目当の形状は「筋割」や「千切透し」のような古風でオーバードックスなものが多い。

銃身や銃床も普遍的な形状で、地味な印象をもつ。時には濃厚な銃身象嵌や台木の飾金具のあるものを見るが、堺や日野ほど華美ではない。

細筒の中では田付流仕法の射的筒が比較的多く見られ、地板の彫刻や象嵌、蟹目ナキ内カラクリが用いられる点は日野と同様である。

「するめ」とも称される二個の巻ゼンマイを内蔵する蟹目ナキ内カラクリを「一貫斎」の発明とする説があるが、このカラクリは慶長ころの作品にも見られ、安永七年生まれの一貫斎重恭の活動期以前に既に存在したものである。

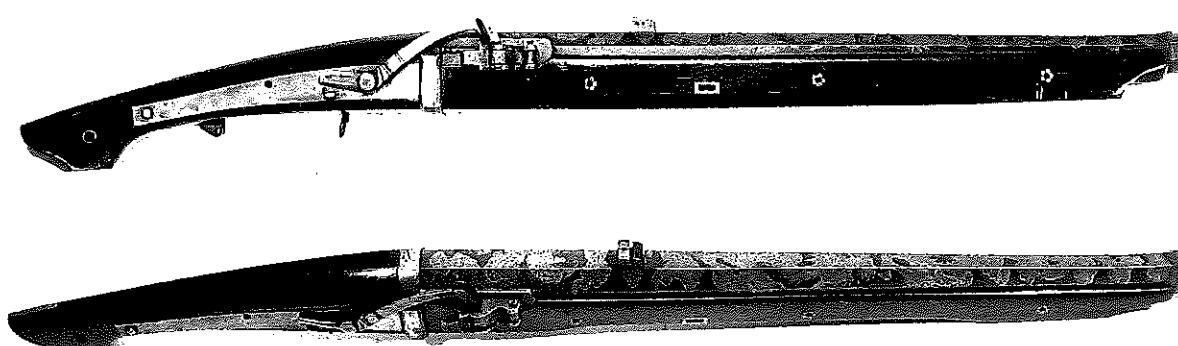
鍛冶名として対外的には國友姓で統一



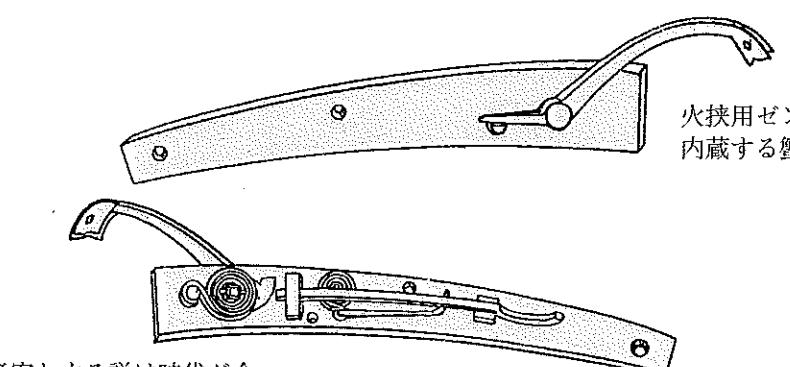
銘 江州 國友基兵衛有政
全長135センチ、口径3.2センチ



銘 國友藤兵衛能當
真鍮地板には片切彫で飾りを入れてある。



六匁玉筒 雲龍総銀象嵌 備前蝶紋入
銘 江州 國友卯太夫典保 全長89センチ、口径1.6センチ



火挿用ゼンマイと、引金用ゼンマイを内蔵する蟹目ナキ内カラクリ。

これを一貫斎の考案とする説は時代が合わず、一貫斎文書にも記載がない。また、重恭は一貫斎の個名であるが、能當は藤兵衛家歴代の使用があり、能當即一貫斎ではない。

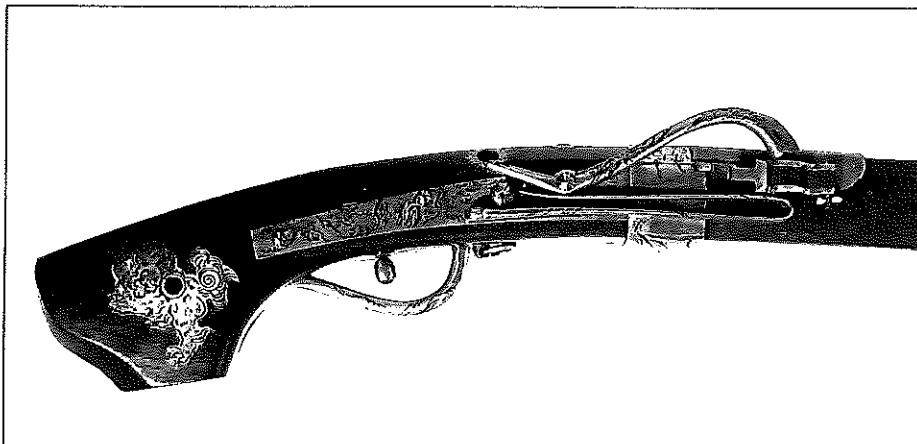
蟹目ナキ内カラクリ

しているが、本来の姓として中村、大島、富岡、脇坂、辻、辻村、高橋、速水など
が知られる。

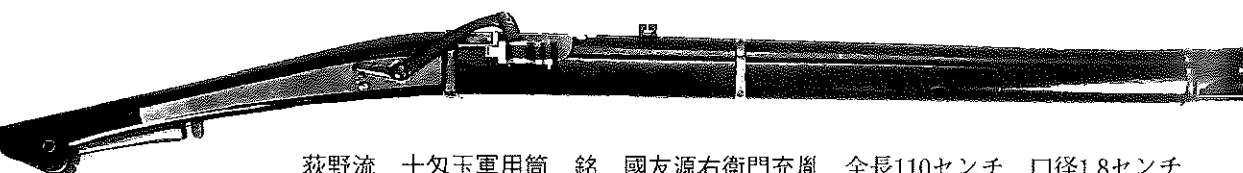
台師は大島吉兵衛、伴治平、富岡源次郎、川瀬宗三郎、四居仁太夫、田中又四郎、高橋友左衛門、國友九郎左衛門、吉田三郎左衛門、國友喜右衛門、國友九左衛門、國友與兵衛至純、吉田友左衛門、四居角左衛門らがあり、金具師として金沢金右衛門、平塚九郎次、島崎久太夫、友田庄七、八木新兵衛、富岡源兵衛、辻村長右衛門、吉田幸七、奥谷伝右衛門、友田九太夫らの名がみられる。



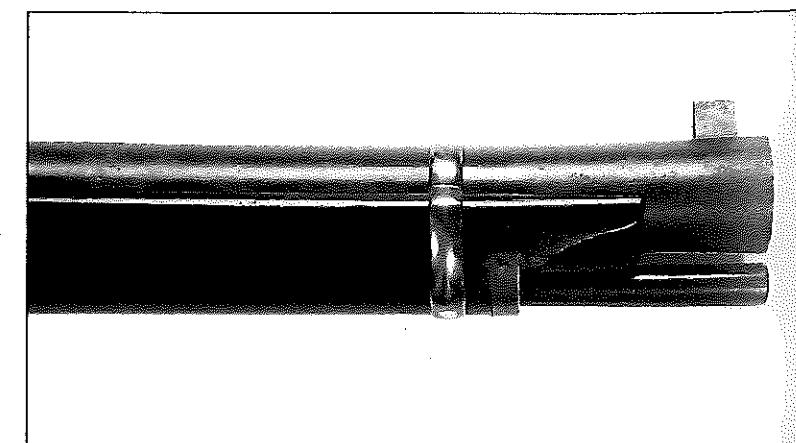
一匁玉射的専用筒 銘 國友九兵恭峯 全長128.5センチ、口径0.9センチ



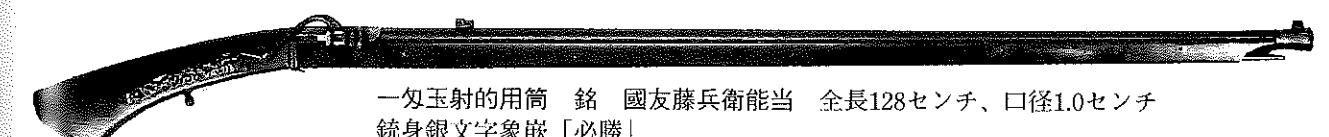
全金具に綿密な注文彫刻。



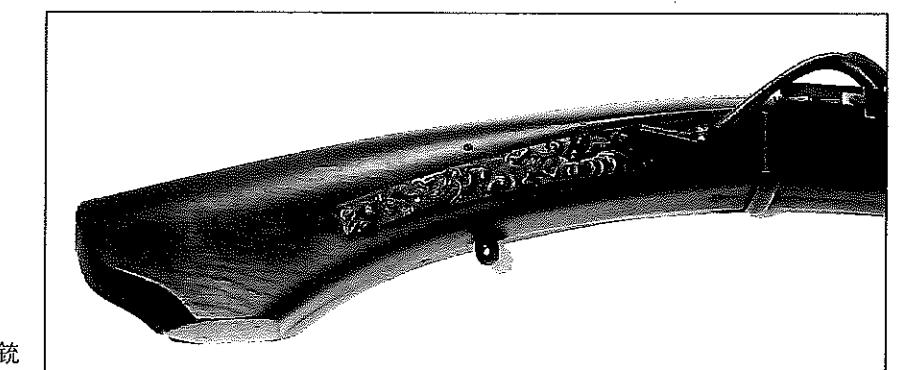
荻野流 十匁玉軍用筒 銘 國友源右衛門充胤 全長110センチ、口径1.8センチ



関流用銃に似た銃身。



一匁玉射的用筒 銘 國友藤兵衛能當 全長128センチ、口径1.0センチ
銃身銀文字象嵌「必勝」



國友 一貫斎愛用銃



高肉彫り金銀象嵌鉄地板

□ 阿波筒

〈四国・徳島県〉

四国、すなわち阿波・土佐・讃岐・伊予の中では、阿波は最大の鉄砲の生産量を誇り、徳島藩の火縄銃保有数は四国において最も最大であった。

蜂須賀家の鉄砲好みといわれるのがそれで、阿州筒として典型的な外観と、特異な照準器などの様式をみせている。

阿波筒は現存数も多く、主として城備用の軍用銃で狭間筒がほとんどである。これらは全長一・三メートルから二メートルにおよぶもので、徒手で支えて発射するものではなく、城砦の銃眼（鉄砲狭間）などに置いて使用するものである（写真1）。

銃身は八角銃身、柑子も八角で阿波筒特有の形状をもつ。

前後の目当にはコの字型の照尺が差し込まれており、これを立てることによって精密な射撃を可能としたと思われる。

この照尺の使用法は不明であるが、阿波筒特有のものである。単に照星、照門を挟むように差し込まれており、脱落し



写真1 大小狭間筒
上から阿州石川儀左衛門正秀作
阿州石川武五良正光作
阿州国見治右衛門作
阿州近藤八百六正高作

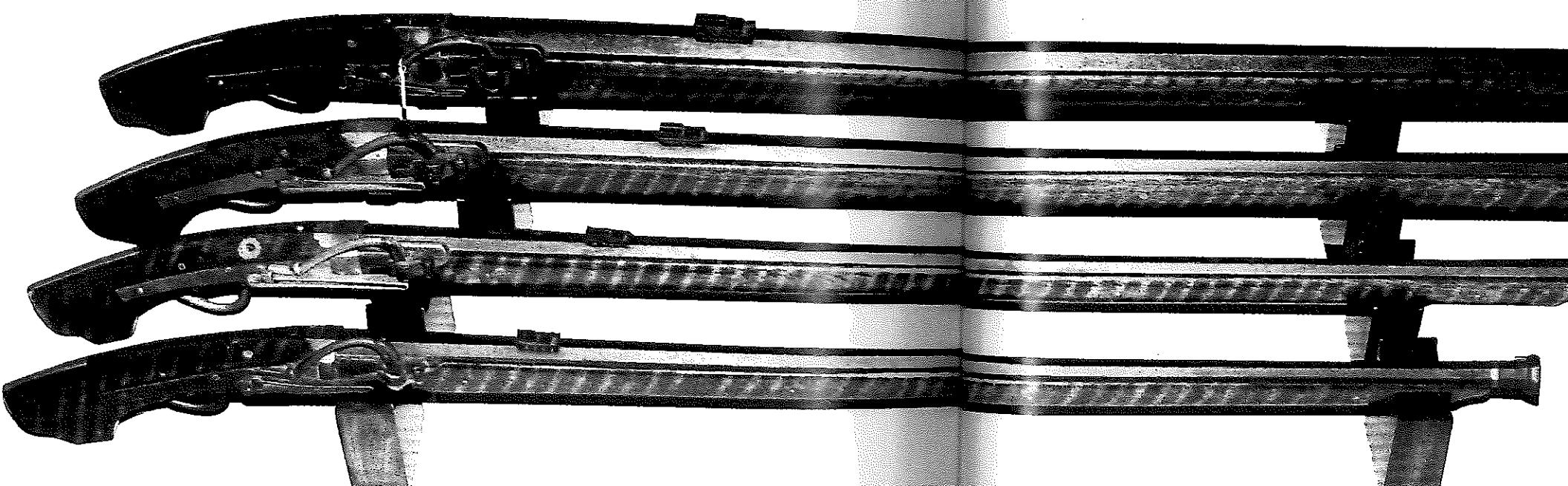


写真2 阿波筒特有の照尺・立て矢倉

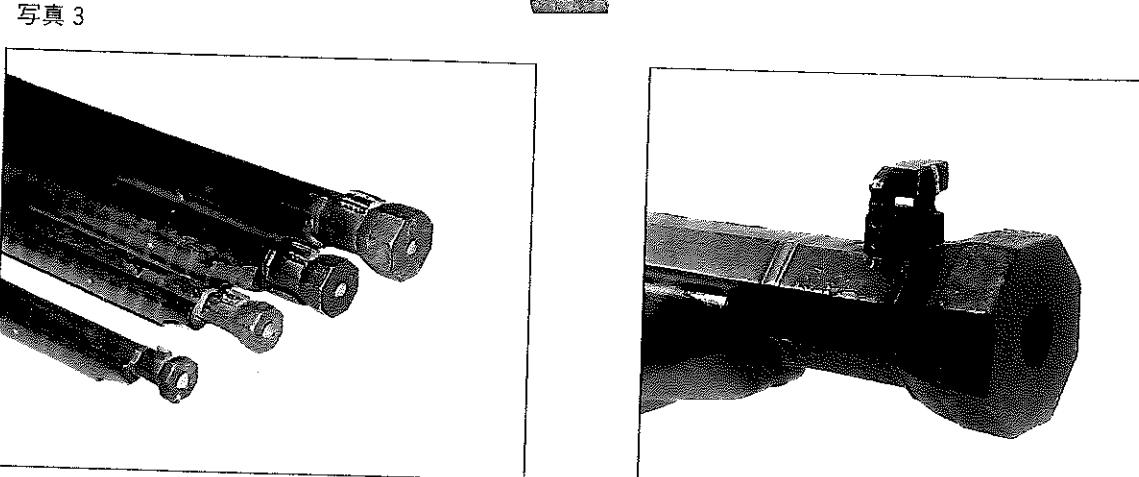


写真3

て失われているものも多い（写真2）。阿波鉄砲の不思議は口径の大ささにある。二メートルに近い大鉄砲も通常の細筒にあっても十一ミリ前後の小口径で、軍用としての威力に欠ける（写真3）。

太い銃身に細い銃腔は過重なものとなり、鉄材の無駄使いともとれる。

阿波筒の鉄味は悪く、強度に自信がないために肉厚をあつくしたと悪口を言う者もあるが、そうではあるまい。

実戦において銃弾を統一することは近代戦の銃器にも求められたことであり、先進的な藩の戦略であったのであろう。

また、一説には藩内では庶民も射撃を楽しみ、祭日や縁日には境内で射的を競い、彼らの使用したもののがこの小口径の狭間筒型の射撃銃であるという。

銃床は、台カブの大きい形で多分に堺筒の影響をうけている。虎空の縞目が美しい明るい色に仕上げられているが、人工的に描かれたもので自然の木目ではない。

目釘孔には◎形と六稜の星形等の座金が用いられているが、これを蜂須賀家の家紋を意匠したものとする者がいるが、根拠のない説である。

阿波の大筒も特徴が強く、銃把にはナ